

◇江戸遺跡研究会第85回例会は、2002年5月15日（水）18:30より江戸東京博物館◇
◇学習室にて行われ、小池聡氏より「港区上行寺跡・同門前町屋跡遺跡の調査」の◇
◇報告をいただきました。◇

港区上行寺跡・同門前町屋跡遺跡の調査

小池 聡

（盤古堂考古学研究所）

港区高輪一丁目27番地に所在する上行寺跡・同門前町屋跡遺跡の調査を、平成13年9月20日から平成14年5月8日まで行った。調査面積は約6,000m²である。調査原因はマンション建設である。現地調査終了後僅かに2週間であり、現状では出土遺物の約50%のみ水洗が終了している状況であるので、ここでは現地調査時の所見に基づいた成果についてのみ報告する。

2. 遺跡の立地（第1図）

本遺跡は、JR品川駅の北西約800mに位置する。西側を桜田通り（国道1号線）が北上している。また、東側は旧町名を残す二本榎通りに面している。

地形的には、高輪台と呼ばれる台地上の平坦面が調査範囲の東側約2/3を占め、西側部分は斜面部と北東に開口すると推定される谷低地部となっている。台地斜面部と谷低地部との比高差は約4mを測る。標高は約28～19mである。

周辺には、台地上及び低地部に寺院が比較的集中している。

3. 上行寺及び同門前町屋の沿革（第2～5図）

富士山上行寺は『御府内寺社備考』によれば、慶長元年（1596年）江戸府内に桜田寺地を拝領する。その後、元和元年（1615年）八丁堀、寛永12年（1635年）に高輪伊皿子へ替え地となり、寛文8年（1668年）の火災により同地へ移転している。隣接地の古老談話では、昭和37年頃神奈川県伊勢原市へ移転したとのことである。伊勢原市には証言どおり現存している。

絵図による変遷を追うと、明暦3年（1657年）の『江戸大絵図』（第2図）では、当該地は光学院？が存在し東側に町屋が描かれている。また、延宝7年（1679年）の『江戸方角安見図』（第3図）では浄行寺・永真寺の記載が認められ、東側と南側に町屋が描かれる。安政4年（1857年）の『芝三田 二本榎 高輪邊絵図』（第4図）では、上行寺と東・南・西面に町屋が描かれる。

明治28年の『東京実測全図』（第5図）ではほぼ現況地形どおりの状況が窺える。なお、同図には谷低地部に徳明寺の記載がある。

また、二本榎上行寺門前町屋については文政11年（1828年）の『江戸町方書上』によれば、成立年代は不明であるが、元禄15年（1703年）2月と延享2年（1745年）に町名の由来となっている2本の榎火が焼き枯れる程の火災に遭ったとの記載があり上行寺も同時に罹災していると推定される。

4. 調査で検出された遺構（第7図）

調査時に振り分けた遺構番号は総数約550基である。出土遺物がなかった柱穴・土坑などや又は礎石群でも調査時に遺構番号を付していないものもあり、遺構総数は約800～900基程度ではないかと考えられる。

検出遺構の種別は、石垣、段切り、礎石群、堀、溝、地下室、ゴミ坑、採土坑？、墓坑、井戸、雪隠、水琴窟、池、瓦溜まり、雨落ち、土坑、柱穴等が挙げられる。

各遺構の配置から、1・2を東面門前町屋部分、3が南面門前町屋部分と推定される。4は礎石群が主体となっており、上行寺本堂ほかの建物と推定される。また、5～7は墓坑が集中しており墓域と考えられる。なお、南面門前町屋は低い石垣や溝などで区画され、西に下がる地形に沿って階段状に形成されている可能性が高いと判断される。

調査時に確認された各遺構の特徴を述べると、谷低地部の堀は出土遺物がほとんどなく明確に時期決定できないが、主軸方向が町割りとは異なっている。覆土などの特徴から江戸初期あるいはそれ以前の所産であると推定される。

上行寺本堂など建物群の礎石群（4）は、墓石を転用しているものが多く、その際墓碑銘を判読できないように「潰す」・「削る」など加工している。また、掘り方を持つ堅固な礎石も認められ、大型建物の存在が推定される。礎石群は2面認められ、2面目の直上に焼土層が認められる。

3ヶ所確認された墓域は、墓坑の形態・埋葬形態に差が認められる。5の台地上平坦面の墓域では方形又は長方形の掘り方内に、凝灰岩系切石の蓋石を持つ甕棺、方形木棺、寝棺、火消し壺や陶製蔵骨器が埋納されている。6の台地斜面部墓域では円形掘り方内に木片を伴い人骨が出土しているものも認められるので、直葬又は早桶などの埋葬形態

が推定される。7の谷低地部墓域では方形掘り方内に方形木棺・甕棺を凝灰岩系切石の蓋石を施して埋納している。墓域間では階層差などによる埋葬形態差が存在する可能性が高い。なお、方形木棺・寝棺・甕棺ともに「檜」が充填されている例が認められる。

台地斜面部は大規模な段切りが施され、横穴状の室や地下室が構築されている。このうち124Rには陶製植木鉢など8点が床面直上に正位で置かれており、植木用の室かと推定される。また、この段切りは明治期に入って大谷石の大規模な石垣が構築されている。

斜面部の盛土層はG～N-15～23に掛けて2面目礎石群以下で、北東方向に開口する谷地形を埋めるように最大で3m程度施されている。盛土層中の出土遺物は少ないが、盛土層直下の不整形土坑520Rからは所謂初期伊万里皿が出土している。また、盛土層下の斜面部では、小規模な畝状遺構が認められ、畑として土地利用されていた可能性が高いと推定される。

5. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、江戸期から昭和30年代までの陶磁器・瓦・金属器・漆器を含む木製品など約1200箱に及んでいる。前述したように現状では約50%程度水洗作業が終了している。従ってその様相については、今後の遺物整理に期待したい。

なお、江戸期以前の出土遺物としては、古墳時代後期土師器片と縄文時代中期後半の土器片が微量ながら出土しているが、該期の遺構は検出されなかった。

6. まとめ

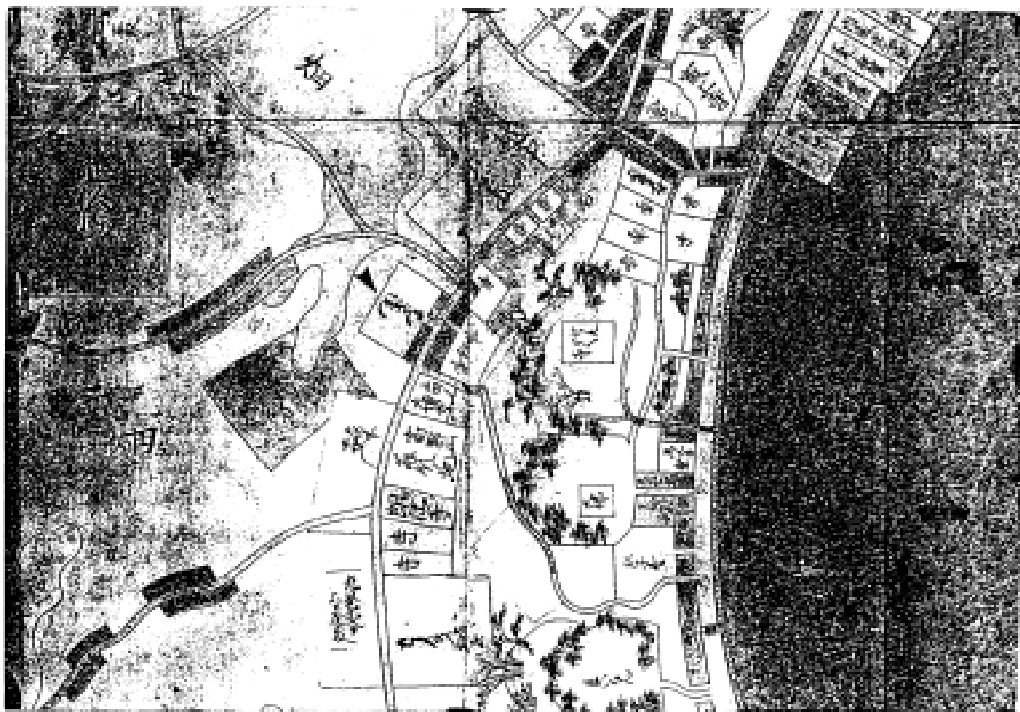
今回の調査では、前述した各絵図または『御府内寺社備考』に掲載された上行寺境内・同門前町屋絵図（第6図）と遺構群がほぼ近い様相で検出された。今後の出土品整理をとおして、礎石群・遺構群の重複関係や陶磁器類の年代観から上行寺及び同門前町屋の変遷をより詳細に、解明していければと考えている。

また、上行寺本堂など建物群の配置や間取り、門前町屋町割りや間取りなど絵図や文献との検討も大きな課題である。

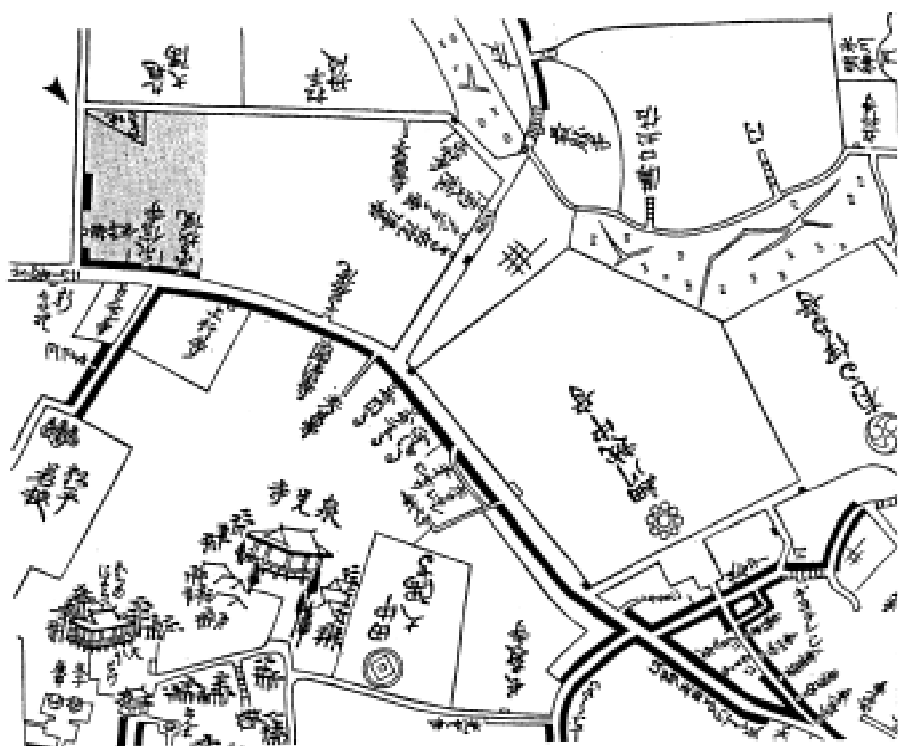
いずれにしても、現地調査が終了したばかりであり、寄り多くの成果を蓄積出来るよう整理作業を進めてゆく所存である。



第1図 遺跡の位置



第2図 「江戸大絵図」明暦3(1657)年



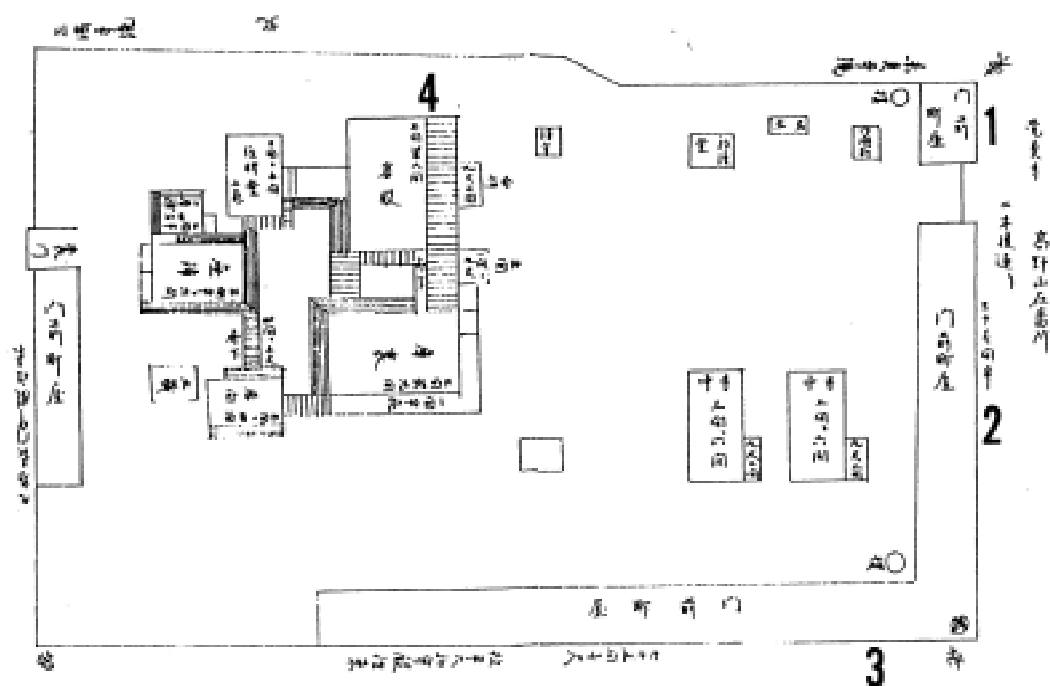
第3図 「江戸方角安見図」延宝7(1679)年



第4図 「芝三田 二本榎 高輪邊絵図」安政4(1857)年



第5図 「東京実測全図」明治28(1895)年



第6図 上行寺境内図（「御府内寺社備考」）



第7図 上行寺跡・同門前町屋跡遺跡全体図(1) (方眼は4m)



上行寺跡・同門前町屋跡遺跡全体図(2) (方眼は4m)